

強さの秘められた作品。今後のさらなる展開が期待されてグランプリに！

生と死に折り合いをつけ、自分をみつめるために写真に取り組んだ仲田さん。今の自分や家族の写真と一緒に過去の母親のスナップなども取り混ぜ、多数のイメージで完成度高く構成した展示が好評価。父親も巻き込んでいきたいという個展プランが審査員の注目を集めました。

受賞作 「美しい速度で」

14年前の母の死の衝撃と混乱を乗り越えられたのは、写真があったから。写真を通すと素直になれた。「美しい速度で」とは人生のこと。懸命に人生を生きる人を指している。これまでは自分を見つめるための写真を撮ってきたが、今後は次のステップを目指したい。個展ではもつ



と奥深いところを探って自分のすべてを出していきたい。母の遺品を自分が身にまとい、父に写真を撮ってもらうなど……いろいろな試みを考えている。



審査員コメント

秋山伸

「『美しい速度』というタイトルもいい。見ていくことで、作品の中に時間性を感じることができる。しかし、ポートフォリオに比べて展示ではその魅力が薄れた感が否めない。音楽的な構成が実現すればもっとよかった。」

鈴木理策

「写真に期待するものが自分の場合と異なるけれども、展示を見た時とても心が動いた。彼女自身の強さと人生そのものが写真になっている。」

土田ヒロミ

「完成度の高さがある作品。強い意志を持っている作家。個展ではお母さんの遺品を身につけてお父さんに写真を撮ってもらうプランに期待したい。ぜひ実現してほしい。」

姫野希美

「生と死が渾然一体となった感覚。自分の人生に光を当てる写真家だから難しい部分もあるが、作者なりの生と死の折り合いの付け方が強く、良いと思った。対峙しようとする強さがとても好き。」

増田玲

「無防備な自分の写真を中心に、そのまわりに広がっていく写真。ポートフォリオにも力がこもっていたが、展示でもまた違う次のものを見せようと挑戦していた。さらに広い空間での展示を見てみたい。」



仲田絵美 Emi Nakata

1988年生まれ。



FINALISTS ※五十音順

桐生真輔

仲田絵美

中村彰宏

野口健吾

三嶋一路

蕭又滋

JUDGES ※五十音順、敬称略

秋山伸 (グラフィックデザイナー・パブリッシャー)

鈴木理策 (写真家)

土田ヒロミ (写真家)

姫野希美 (赤々舎代表取締役・ディレクター)

増田玲 (東京国立近代美術館主任研究員)

■ 出品者のプレゼンテーションと質疑応答の概略



三嶋一路 Ichiro Mishima

「植物を観察する [ネーミングライツはヒューマンライツ]」

1



この作品は、カメラを使って植物観察を行うのではなく、植物を撮影して展示するという写真のメカニズムがもつ性質のものがテーマ。展示空間で様々な写真の読み取り方を引き起こし、この場所で写真を見る経験に含まれる数多くの情報に注意深くありたいと思う。

〈質疑応答〉

- 土田：展示では棚上の植物に光を当て、下の写真が影になっていて見づらいが？
- 三嶋：写真に対して常に批判的でありたい。写真が影で暗くなっているのは意識的。
- 秋山：植物に光を当て、写真が影になる今回の展示に行き着いた経緯は？
- 三嶋：地下という場所で写真と植物を展示すること、写真のメカニズムを示すため。



中村彰宏 Akihiro Nakamura

「at the site where a factory once stood」

2



近年、産業の空洞化による工場の移転や統廃合に伴い、各地で工場跡地が発生している。そんな首都圏の工場跡地に現れたショッピングセンターや高層マンションなどを撮影した。工場の跡地にてきた新たな風景から、現在起きている社会の変化の一端を伝えたい。

〈質疑応答〉

- 秋山：右側に9枚、左側に3枚という展示構成にはどんな意味があるの？
- 中村：左の3枚は変わりつつある工事風景、右の9枚は開発が完成した新たな風景。
- 土田：完成した風景を見せても、あなたが取り上げるテーマが伝わらないのでは？
- 中村：それで開発途中の風景も意図的に混ぜて展示した。



仲田絵美 Emi Nakata

「美しい速度で」

3



“人が死んでしまうこと” “人が生きていくこと” を考えて生まれた作品。14年前に母が死んだ光景は今も私の中に強烈な印象を残している。それで心を閉ざしていた自分が、写真を撮る行為で唯一素直になれた。「美しい速度で」=人が生きていく道のり。人生そのもの。

〈質疑応答〉

- 姫野：“14年前のあの日に受けた衝撃”を具体的に言ってもらえる？
- 仲田：私が10歳の時、母が病気で死ぬ瞬間を見た。わけが分からなくなるほど混乱し誰にも言えなかった。
- 土田：14年間も抜け出せないほどの大きな衝撃だったのか？
- 仲田：それが写真と出合って楽になった。
- 秋山：展示で不定形のサイズの写真を寄せて見せているのはどういう意図か？
- 仲田：中心に私。右から左へ時間軸がある。見る人に全部で一つと認識させたくて。



桐生真輔 Shinsuke Kiryu

「文身」

4



文身の多義性を提示することで、人間の認識の在り方、価値観の形成に疑問を投げかける作品。今回展示した写真のモデルの女性は筋肉が徐々に衰える病。彼女のために「こえ」という意味の漢字を選び、胸に文身を施した姿をヌードで撮影した。施術中の写真と彼女の書いた言葉をiPadに収め、壁面とは次元を変えて展示した。

〈質疑応答〉

- 鈴木：この一連の作業を写真で発表することに対して不自由さを感じないか？
- 桐生：そうは思わない。被写体の方が亡くなったら写真の存在だけが残る。
- 土田：文字の意味性、彫るという行為、モデルの募集、人体のビジュアル性など、あなたの創作活動は盛りだくさん過ぎて、写真という表現がうまく伝わっていないのでは？
- 桐生：何か一点にピントを合わせて見ていこうという考えには賛同できない。



野口健吾 Kengo Noguchi

「庵の人々」

5



一般的にホームレスや浮浪者と呼ばれる存在になぜか惹かれる。そこには私のリアリズム、例えば生きること、孤独感、自由への憧れ、お金や将来のことが入り交じっている。他人と知り合い、写真に撮ることで自分自身のポートレートを撮ろうとしているのかもしれない。

〈質疑応答〉

- 鈴木：これまでに何人くらいのホームレスの人たちを撮り、今回チョイスしたのか？
- 野口：30人くらい撮った中から、写真展に出す許可をもらった15人を選んでいる。
- 秋山：どういふふうにして撮影しているのか？
- 野口：敬意をもって人間関係をつくった後で、写真撮影のアプローチをする。



蕭又滋 Arron Hsiao

「小径 / Path」

6



「小径」というタイトルは、ある目標に向かう道のり。この小径の行き先は夢のようなすてきな世界だが、まだ困難だらけの道のりを頑張って前へ進まなければならない。この作品は自分の内面を映したものかもしれない。私が感じた世界をレンズを通して切り取った。

〈質疑応答〉

- 秋山：ポートフォリオでは写真の外側が黒で統一されていたが展示でそうしなかった理由は？
- 蕭：私にとって「黒」は重要だったが、ギャラリーの壁を黒くすることは許可されなかった。
- 土田：ポートフォリオはすごく魅力的だったが、展示は残念だった。チョイスの意図は？
- 蕭：中央の「羊の写真」は幸せの象徴。「パンダ」や「棧橋の子供」も大事な写真。

■審査員の感想

ファイナリスト6人のプレゼンテーションが終わり、ここからはガーディアン・ガーデンの菅沼の進行で一人一人についての感想を聞いていく。

●三嶋さんの作品について。秋山さん：「写真展の展示として賛否両論あると思うが、写真というメディアに真剣に向き合っているからこそそのチャレンジだと思う。評価したい」。姫野さん：「いろんな意味で面白い作品。ポートフォリオからは作者の思いが伝わってきたが、展示は残念だった」。土田さん：「写真論を写真作品に持ち込むのは大に良いが、一枚の写真を撮る大切さ、面白さをわかってほしい」。増田さん：「展示は予想していたよりは面白かった。プレゼンテーションを聞いているともどかしく、広がっていかなかった」。鈴木さん：「『1_WALL』という場所だからこそギリギリ成立する展示だと思う。写真は意識的に撮れていないのでは」。●中村さんの作品について。土田さん：「写真を楽しみながら撮っている。テクニカルな部分もしっかりこなしているが、テーマの設定に無理があった」。増田さん：「土田さんとは正反対の意見で、今だからこそ生きるテーマだと思う。作者の考える方向で撮り続けてほしい」。秋山さん：「完成した風景と開発途中の写真を分けて展示したことは中途半端で伝わりづらかった。客観的に分類せずに、経験や偶然を取り入れた構成でよかったかも」。鈴木さん：「ひとことと言うと、あせている。もっとモニュメンタルなものが偶然写っているような写真がよかったのでは」。姫野さん：「うまく響いてこなかった。つかみきれない作品。今の視点だと焦点が合わない」。●仲田さんの作品について。秋山さん：「今回の展示よりはポートフォリオのほうが好きだった。『美しい速度で』というタイトルも良かったし、構成にも抑揚があって良かった。しかし壁面という空間にその時間的な抑揚やリズムは表現できていなかった」。姫野さん：「プレゼンテーションを聞き、この展示には生と死が渦巻いているように渾然一体となっているようにも思え、好きな作品」。土田さん：「プレゼンテーションを聞いて、強い意志を感じた。ただ、作品やテーマは、ありふれたフォーマットになっている」。増田さん：「ポートフォリオは良かったが、今回の展示とはギャップがあった。プレゼンテーションを聞いて、自分なりのトライをしていることを評価したい」。鈴木さん：「展示を見た瞬間は心が動いた。しかし、プレゼンテーションで語った作者自身の人生は写真を見る側には関係のないこと。写真の力で勝負すればいい」。●桐生さんの作品について。鈴木さん：「イレズミを彫っているところなど作品づくりのプロセスをもっと出して良かったのでは」。姫野さん：「作者がやろうとしていることが多すぎて、その全貌はこの場では伝わりづらかったと思う」。増田



さんと正反対の意見で、今だからこそ生きるテーマだと思う。作者の考える方向で撮り続けてほしい」。秋山さん：「完成した風景と開発途中の写真を分けて展示したことは中途半端で伝わりづらかった。客観的に分類せずに、経験や偶然を取り入れた構成でよかったかも」。鈴木さん：「ひとことと言うと、あせている。もっとモニュメンタルなものが偶然写っているような写真がよかったのでは」。姫野さん：「うまく響いてこなかった。つかみきれない作品。今の視点だと焦点が合わない」。●仲田さんの作品について。秋山さん：「今回の展示よりはポートフォリオのほうが好きだった。『美しい速度で』というタイトルも良かったし、構成にも抑揚があって良かった。しかし壁面という空間にその時間的な抑揚やリズムは表現できていなかった」。姫野さん：「プレゼンテーションを聞き、この展示には生と死が渦巻いているように渾然一体となっているようにも思え、好きな作品」。土田さん：「プレゼンテーションを聞いて、強い意志を感じた。ただ、作品やテーマは、ありふれたフォーマットになっている」。増田さん：「ポートフォリオは良かったが、今回の展示とはギャップがあった。プレゼンテーションを聞いて、自分なりのトライをしていることを評価したい」。鈴木さん：「展示を見た瞬間は心が動いた。しかし、プレゼンテーションで語った作者自身の人生は写真を見る側には関係のないこと。写真の力で勝負すればいい」。●桐生さんの作品について。鈴木さん：「イレズミを彫っているところなど作品づくりのプロセスをもっと出して良かったのでは」。姫野さん：「作者がやろうとしていることが多すぎて、その全貌はこの場では伝わりづらかったと思う」。増田

さん：「写真を撮ることと、肌文字を刻む行為をゆっくり出してほしかった。このモデルの女性がいきなり出てくることで、見る側としては一気に全開に振り切れ、混乱してしまった」。土田さん：「いろんなことをやろうとして、ちょっと欲張り過ぎたと思う」。秋山さん：「この作品では写真はあくまでひとつの媒体記録であって、イレズミそのものと、それを彫るまでの過程が作品なのではないか。あるいは、とても私的なレベルで製作～購入の過程がすでに完結しているともいえる。だとすると、それを公にすることが必要なことだろうかという疑問も残る。やっていることは面白いが……」。●野口さんの作品について。鈴木さん：「グリッド状の展示は、パッと見でやろうとしていることがわかってしまい、もったいない。しかし、写真をじっくり見ると内容が面白い。飽きない写真」。土田さん：「作者本人はあまり計算してこの作品をつくっていないが、この手のテーマは今、かなり消費されてしまっている」。姫野さん：「この写真は突出したものではないと思うが、無自覚に人と人に対して向き合っているところが、良いなあと思う」。秋山さん：「作者の素直さが写真に出ている。本にしたら気持ちの良い写真集になると思う。この素直さがバネとなって飛躍することもあり得る。次に期待したい」。増田さん：「グリッド状に並べて展示するという事は、写真を比較して見せること。それを作者本人が自覚していないところが才能なのでは」。●蕭さんの作品について。土田さん：「とても力強い写真的な身体性をもっている。写真は良いが、薄っぺらいヒューマニズムの表現はちょっと残念」。増田さん：「ポートフォリオは点数もあり質も高かったが、展示を見た感じは評価が下がった。台湾からの参加は喜ばしいこと」。姫野さん：「ポートフォリオはすごく良いと思った。しかし、その中から展示に選んだ写真が弱かった」。秋山さん：「展示の写真はほのぼのとし過ぎ。ポートフォリオの『苦境』とも言うべき重いテーマ性が感じられたら良かった」。鈴木さん：「写真を撮る時はプレゼンテーションで言ったような意味は考えていないと思う。感覚的にシャッターを押している人なのでは」。



■審査員による投票

一人一人に対する感想を聞いたところで各審査員にグランプリとして推したい人を2名ずつ選んでもらった。結果は……

秋山／三嶋 仲田
鈴木／三嶋 桐生
土田／仲田 蕭
姫野／仲田 桐生
増田／仲田 野口

票を集計すると、
仲田4票／三嶋2票／桐生2票／野口1票／蕭1票

進行の菅沼が「4票の仲田さん、2票の三嶋さん、桐生さんの3人に絞って考えてみましょう」と提案し、それぞれを推した理由を聞いた。まず、仲田さんに投票した秋山さんは「もっと広いスペースでやるとどうなるかという期待感」。土田さんは「類型的な作品だが、完成度の高さがある。それと、個展ではお母さんの遺品を身につけてお父さんに写真を撮ってもらおうという残酷なプランが面白かった」。姫野さんは「自分の人生に光を当てる写真家だから難しい部分もあるが、作者の生と死の折り合いの付け方が強く、良いと思った」。増田さんは「やはり、広い空間での展示を見てみたい」と語る。続いて三嶋さんに投票した理由を鈴木さんは「これまで見たことのないものを見てみたい。写真の枠組みから考えると面白」。秋山さんは「展示を任せたら写真にどんなことが起こるだろうという期待で」と答える。最後に桐生さんに票を投じた姫野さんは「この一連の営みは大変な作業。その危ういことをやろうとする作者の大きな志がすばらしい」。鈴木さんは「あの作業全部を引き受けるということは難しいことだが大事なことだと思う」と述べる。それぞれに



応援演説を聞いたところで、各審査員に1人だけ選んでもらった。結果は土田さんと姫野さんと増田さんの3名が仲田さんに票を入れ、過半数となる。これ以上議論しても考えは変わらないと菅沼が判断し、「第7回写真『1_WALL』のグランプリは仲田絵美さん！」と高らかに宣言。満員の会場から大きな拍手が沸き起こり、公開最終審査会が終了した。

■出品者インタビュー

三嶋一路

とても勉強になりました。特殊なアプローチで作品をつくっているんで、その方法自体を発見したいと思い応募しました。今回の一連の審査で写真主導の思考プロセスを理解でき、審査員の方々の話を聞く機会があって、とても刺激をもらいました。

中村彰宏

ポートフォリオレビューから公開審査会まで長丁場のなかで、すごく多くの言葉をいただいて、今後の作品づくりをする上でとてもためになりました。展示は自分のベストを尽くしたつもりですが、もっと考えなければいけませんね。

仲田絵美

グランプリという結果はすごくうれしいです。この結果を最初に父に知らせたいですね。審査員の方々のいろんな言葉が勉強になります。1年後の個展に向けて、まだまだ頑張ろうと思いました。なんとか父を説得して撮影に協力してもらわないと。

桐生真輔

写真を私は「美術」として捉えているので、今回の審査で伝統的な写真の文脈で見られていたことが残念でした。自分の作品をもっといろんな視点で見てもらいたいです。出版して多くの人に見てもらおうというの手もかもしません。

野口健吾

誰がグランプリになるのか読めず、エキサイティングで楽しく公開審査でした。審査員の方が出品者一人一人に対して丁寧にコメントされ勉強になりました。被写体が被写体だけに写真が評価されファイナリストに残ったのがうれしい。

蕭又滋

こうした写真のコンペティションは台湾にはありません。審査員の方にそれぞれ親身にアドバイスしていただき、大変勉強になりました。現在、台湾で写真家のアシスタントをしているのですが、機会があれば日本でも活動したいと思っています。

<文中一部敬称略 取材・文／田尻英二>

■お問い合わせ先

株式会社リクルートホールディングス ガーディアン・ガーデン
〒104-0061 東京都中央区銀座7-3-5 ヒューリック銀座7丁目ビルB1F
TEL:03-5568-8818 FAX:03-5568-0512 http://rcc.recruit.co.jp
Twitter:@guardiangarden Facebook:facebook.com/guardiangarden.tokyo

Guardian
Garden

RECRUIT